

2019 8 AUG No.371

ARCHITECT

THE JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS



静岡地域会 特集

CONTENTS

長谷川逸子氏インタビュー	2
塩見 寛	
JIA 静岡 2019 年度建築家講演会	6
高島 ゆかり	
第 1 回 JIA 塾	7
石橋 剛	
エッセイ：プリツカー賞と磯崎新氏 グランシップから見た創造性の行方	8
鳥居 久保	
愛知学泉大学建築教室	9
西村 和哉	
自作自演 234	10
伊井 伸	
わたしのとっておき⑫	10
渡辺 隆	
保存情報 第 213 回	
データ発掘：蒲郡北駅前地下道	11
塚本 隆典	
データ発掘：旧湯屋小学校	11
原 眞佐実	
地域会だより	12
Bulletin Board	12
編集後記	12
大橋 康孝・石川 英樹	
豊橋 sebone と共催「おみせをつくろう」	表 3
黒野 有一郎	

表紙：長谷川逸子(長谷川逸子・建築計画工房)

表紙

はじめての公共建築を考えてゆく中で、市民によく使ってもらうものをつくりたい!と強く思いました。設計を公開しながら、利用勝手を知ってもらおうと市民と意見交換を行い要望も聞いてきました。行政の権威・シンボル、建築家の強い作品性だった公共建築がその利用者の活動する場とするためにいろいろ努力してつくりあげてきました。昔から私にとって子供から高齢者までが自由に楽しく過ごせるところこそが公共の場と考えてきました。ある著名な評論家が「湘南台文化センターには建築はなかった。人で溢れていて見えなかった。」と訪問記を雑誌で書いたり、英国 BBC が撮影に来た際には、テラスにいた地元の人たちにインタビューした時の「長谷川と一緒につくった。」という発言があって、イギリスでの放映で現地の建築家たちを驚かせたりしたこともありました。



長谷川 逸子 (JIA関東甲信越)
長谷川逸子・建築計画工房

インタビュー

建築家

長谷川 逸子



2019年6月24日、東京・湯島の長谷川逸子・建築計画工房に伺って、長谷川逸子さんにインタビューする機会を得ました。

—まず最初に、いきなりですが、現在の仕事はどのような状況でしょうか、お聞かせください。

デザインコンペからプロポーザルが主流になった頃から、選ばれなくなりました。プロポーザルはデザイン提案ではなく、建築士の数や実績等により点数付けされて、点数の高いところを選ぶので、それで選ばれなくなってしまいました。

—1980年代90年代頃は自治体が盛んにデザインコンペをした時代ですが、簡易で経費もかからないということで国がプロポーザルを推奨しはじめて、県や市町村もその動きに追随していきましたね。

そう。ですから平成時代の初期には入っていたコンペが、プロポーザルが主流になると選んではもらえなくなったんですね。そういう日本の流れに対して、中国では国際コンペが盛んに行われるようになりました。かつて日本で行われていたデザインコンペです。2000年ころから中国のコン

ペで1等を取るようになりました。今でも中国ではデザインコンペが数多く実施されています。

中国は何かにつけて杜撰な面がありましたが、今はレベルアップしています。日本のゼネコンの監督などが中国の仕事に関わっていて、日本の技術が伝わっているからです。

事務所には当初から営業担当はいないのですが、仕事は常にあります。中国の仕事が現在もありますし、日本での仕事は、デザインコンペを主流にしていたのでその関係の仕事や、知人の小さなローコストの小住宅が数件あります。

—デザインコンペで数多く一等を取られていますが、なにか秘訣はあるのでしょうか。

コンペの要項には書かれていませんが、コンペを主催する行政側で関係する部署の横のつながりがない中で実施される場合があるので、そういうコラボレーションできていない組織を、横につなげて一つの建築にまとめる提案をすとか、自分の思想を入れてソフトを含めた提案をしてきました。要項で求められる以上のソフト・

運営まで踏み込んで提案してきました。

例えば日立市県営滑川アパートでは、敷地を造成することが当然と考えられていましたが、提案した案は造成工事をせずに、地形を生かしてゆるやかに建物をつなげた集合住宅を提案したところ、そのランドスケープのデザインが評価されました。

中国ではランドスケープを含めたデザインが評価されています。

<上海儀電>



——湘南台文化センター(1985 コンペ実施)は完成したとき(1990)に見に行きましたが、強烈なインパクトを受けたことを覚えています。その建築の姿も衝撃的でしたが、2つの意味でエポックメイキングだと思います。一つは長谷川さんにとって初めての公共建築であるという意味、もう一つは市民参加による設計プロセスのはじまりだったという意味で。

コンペを出しましたが、まさか通るとは思っていませんでした。ちょうどロサンゼルスで初めてのレクチャーがあり成田から飛ぶ予定で成田空港にいましたが、その時に面接をするという連絡があり、事務所スタッフから面接ヒアリングに出たほうがいいというので、飛行機をキャンセルしてロサンゼルス行きはあきらめて、ヒアリングに臨みました。

湘南台文化センターは、初めて応募するデザインコンペで、清家(清)さんが委員長で、榎(文彦)さん磯崎(新)さんが審査委員でした。

市民といっしょに造りあげるというやりかたは、これまでの公共建築にはなかったものであり、だから反発もありました。磯崎さんからは電話で、公共建築とは権威のある建物でなければならない、市民の意見を聞いた、市民と一体の建築は「ポピュラー建築」になるからよくないと、延々と諭されましたが、「ポピュラー建築」のどこが悪いのですかと反論しました(笑)。

当時の藤沢市の葉山市長から、「住宅の設計でも住まい手とよくコミュニケーションをとっているようなので、市民とよく話し合ってほしい」と応援されました。藤沢市民の声を聞くと、いろいろな意見が出てきました。例えば運動場をつくっても、インターハイなどの試合の予定が優先され、市民が使いたいときに使えないと不満が続出してきました。市民の声を聞くワークショップのために、農協が場所を提供しますとの申し出などもあって、市民との集会を続けました。

市民から風景が変になるのは困るとの意見もありましたが、市民にとって元々の敷地が丘であり原っぱだった場所を奪ってしまうのではなく、「丘」を建築的につ

くりますと説明しました。藤沢市民はインテリが多く、意識も高いですから戦いでもありましたが、市民と向き合うことを続けていくことで次第に理解を深めていきました。地鎮祭の時に、「建築は作りません。広場をつくります」と挨拶しましたが、周囲を驚かせたようです。

——新潟市民芸術文化会館(1993 コンペ実施)のときは、どのようでしたでしょうか。

新潟では、コンペのプロデューサーから、ホールは市民が演じるための発表用や練習用のホールではなく、世界的にも有名な団体が演じる舞台ホールを想定しているので、ワークショップを開いて市民の声を聞くのは問題があると言われました。そのため市長がワークショップを直接みに来て、はじめは反対していましたが、市民の熱い思いを聞くワークショップに接して、反対から賛賞に変わっていきました。

当時、他にも設計の仕事が重なっており、新潟でワークショップを繰り返すのは時間的に厳しかったのですが、新潟から直接大阪に飛ぶというようなこともあり、たくさんのスタッフとの協力で乗りこなしていました。

——公共建築は自治体がコンペの実施主体であり、自治体が管理運営主体ですが、多くの公共建築コンペを勝ち取られて、自治体と建築ということに対して、なにが思われることはありますか。

保守的な自治体に出会うとがっかりします。役所が一番なのだという考え方の自治体には閉口しますね。市民は使うだけという考え方であって、市民の声を聞こうとしない。新しいことに目を向けない。そういう自治体と付き合うと疲れます(笑)。ワークショップを開いても、本質的な良さや芸術的な良さ、新しいものを発見しようという姿勢が役所にはないです。そういう自治体では特に建築職の人たちが様々なことに反対する傾向にありますね。

群馬県の太田市でテクノプラザおおた(2008 竣工)を設計の際に、老人の集まる場所がないと聞いて始めたワーク



<プラサヴェルデ(沼津市)>

ショップでしたが、よくよく見ると学生が駅の前で地べたにしゃがみこんでいて、学生の居場所がないことがわかり、土日は老人の集まりの場を、平日午後は学生チューデントロビーとして開放使用する場をつくるということが、ワークショップを開いたことで実現されていきました。

——沼津市にあるプラサヴェルデ(2008 事業コンペ、2014 竣工)では、いつも多くの学生が利用しています。

沼津市も同様で、初めはそんなことは要望にないと反対されました。沼津市も保守的でしたが、学生のためにワークショップを開催しました。開館の除幕式の時に、沼津市長に学生チューデントロビーをつくったことを勝手に褒めたら、逆に後から巻き紙に丁寧に書かれた御礼の手紙が届いてびっくりしました(笑)。

市民に使われ続けていく公共建築をつくるためには、自治体のトップの考え方も大事ですが、特に行政のスタッフの理解が必要です。自治体のトップが保守的で、さらに役所のスタッフが頑なに保守的などころに出会いますが、そういう自治体があるのは残念ですね。

——コンペを勝ち取られたとき、周りからの反応はいかがでしたでしょうか。

コンペを取ると、風当たりが強かったですね。それまで親しく良好な関係であった建築家との距離が遠くなった人もいます。1986年は湘南台文化センターのデザインコンペを受賞したと同時に、眉山ホールで日本建築学会賞作品賞を受賞した年でもありましたが、さまざまな憶測が飛び交っていたようです。国内よりも国外のほうが評価が高いです。ずっとそうです。昨年英国のロイヤル・アカデミー建築賞をいただきましたが、海外にいる建築家の方々からメールやお祝いをいただきましたが、国内の建築界からは反応なしでしたね(笑)。

——建築を目指そうと思われたのはいつ頃でしょうか。何かきっかけはあったのでしょうか。

中学時代は植物学者になりたくて、南アルプスや伊豆など中学校の先生に付いて歩いていました。そして高校1年生の時に、同級生のご両親が建築設計事務所をしていて、友人からその様子を聞いて、「建築家もよいな～」と思いました。建築家になるならば、東京大学に行かなくてはならないと言われました。それで藤枝市の叔父さんに数学IIIを教えてもらい、東京大学に行くための勉強をしていました。ただ中学校から通っていた女子高(静岡精華学園)では、工学部は女性が行く場所ではないと言われました。まだそういう時代だったんですね。学校中から反対されて、集団的ないじめにあって、高校3年生の12月から1か月以上入院していました。学校中で工学部には行かせないという強い方針でした。後々に知るに私より若い人達でも工学部はダメで、女子大家政学部にゆかされると、よく聞きました。

子どもの頃からヨットが好きで、大学に女子のヨット部ができるということで、関東学院大学の建築に入りましたが、あまり大学には行かずにヨットに夢中でした(笑)。いつも横浜のヨットハーバーにいました。

大学2年の夏休みの課題の住宅模型を作って提出したところ、学生の模型展の一

等賞になりました。その模型を見た菊竹(清訓)さんから3年生の時に、京都国際会館(1963 公開コンペ)の模型を作ってくれないかという連絡が入りました。そのとき大きく変わりました。それまで本気になっていなかった建築に目覚めました。4年生の時に、菊竹さんから直接呼ばれて、浅川のアパートの設計をやってほしいという依頼がありました。はじめての設計でした。

菊竹事務所の構造は松井(源吾)さんであり、菊竹さんと松井さんが打ち合わせしているのをよく聞いていました。松井さんが関東学院大学の構造も教えていたので、大学では構造の研究室に入りました。

——構造の研究室ですか。それは意外ですね、初めてお聞きしました。菊竹事務所、それから篠原研究室に行かれたわけですが、どのような感じだったのでしょうか。

菊竹さんにはほんとうに大事にしてもらって、事務所では、菊竹さんの隣の席でした。都城市民会館(1966 竣工)のスケッチを「乳母車の帆」のイメージで描いたんです。菊竹さんに気に入ってもらえて、初期のイメージから大屋根のイメージに展開していくという案がつくられていくのを横で見ているのが楽しかったです。

菊竹事務所では、女性は危ないので現場には出さないと言われました。湘南台の時も危ないと言われた時代でした。そのため、菊竹事務所では主にインテリアと家具の担当でした。

1969年から東京工業大学の篠原一男研究室にいきました。篠原研の構造は木村(俊彦)さんでした。木造は自分たちで構造計算をしていましたが、篠原さんが次第にRC化していく過程で、木村さんが構造担当になって、打ち合わせに同席することが多かったですね。篠原研には11年いました。

今の長谷川事務所の構造設計は、東京工業大学の金箱(温春)さんをお願いしていて、中国の仕事も法規が違いますが、アドバイスの金箱さんに監修をしてもらっています。

菊竹事務所にいた時は松井さん、篠原研究室にいた時は木村さんとの打ち合わせに同席していましたので、構造に関してはほぼ理解できていました。ですからコンペ時の構造は私自身が対応しました。それで充分でした。湘南台文化センターでは実施設計の構造は木村先生をお願いしましたが、ほぼコンペ時と変わることがなく設計してくれました。

<山梨フルーツパーク(山梨市)>



——最後に、事務所を引越しされてから元の事務所を「gallery IHA」として展示やレクチャーをされているとお聞きしています。それは若い世代へのメッセージなのでしょうか。

2016年にNPO「建築とアートの道場」(2017法人化)を起ち上げ、元のアトリエをギャラリーに開放して、作品展やワークショップを開催して、若い人を引き込んでいます。私がプロデュースして、藤原徹平氏など若手建築家をキュレーターに、一つのテーマ4,5回シリーズでレクチャーを企画しています。毎回定員一杯の若い人達が参加しています。道場らしく熱く語る若い人たちとのコミュニケーションは刺激的ですよ(笑)。

<月見の里 学遊館(袋井市)>



インタビューを終えて

長谷川逸子さんとは、もう30年ほどになるだろうか。最初のころ(私は静岡県職員だった)長谷川さんの講演会のあとの飲み会に上司に連れられ同席させてもらっていた。強烈に思い出すのは、2004年「月見の里学遊館」が静岡県都市景観賞最優秀賞になり、その授賞式のときである。私が代表である火の見櫓からまちづくりを考える会の「火の見櫓は、みんなの“象徴”」が優秀賞に選ばれた。授賞式の後、隣席だった私は長谷川さんに「ほんとに最優秀賞がほしかったんですよ」と言ったら、長谷川さんから即座に「いつでも譲ってあげるわよ」と返ってきたとき、何ともいえない清々しさを感じてしまったのである。裏も表もない屈託ない気取らない明るい声に、長谷川さんの人間味を感じて、ますます好きになってしまった。

<静岡大成高校(静岡市)>



<芦屋の住宅(芦屋市)>



長谷川逸子・略年表

- 1941 静岡県焼津市生まれ
- 1964 関東学院大学建築学科卒業
- 1964～1969 菊竹清訓建築設計事務所
- 1969～1979 東京工業大学篠原一男研究室
- 1979 長谷川逸子・建築計画工房
- 1986 日本建築学会賞作品賞(眉山ホール)
- 1986 湘南台文化センター公開コンペ最優秀賞
- 1990 墨田区文化学習センター指名コンペ最優秀賞
- 1992 山梨フルーツパークコンセプトコンペ最優秀賞
- 1993 新潟市民芸術文化会館公開コンペ最優秀賞

- 1995 広島県倉橋町まちづくり指名コンペ最優秀賞
- 1995 ふれあいエスプ塩竈指名コンペ最優秀賞
- 1996 太田市石原団地建替基本計画技術提案最優秀賞
- 1997 静岡県袋井市月見の里指名コンペ最優秀賞
- 1998 黒部市第2特別養護老人ホーム指名コンペ最優秀賞
- 2001 国際ブラザデザインコンペ、台北最優秀賞
- 2002 パチンコホールデザインコンペ最優秀賞
- 2003 珠洲市多目的ホール指名コンペ最優秀賞
- 2006 テクノブラザ太田指名コンペ最優秀賞

私の県庁での最後の仕事、東部コンベンション整備事業(現プラサヴェルデ)の事業コンペと基本設計で、施主と設計者という立場で長谷川さんと対峙できたことは光栄の至りである。沼津の場所を読み込むこと、高校生から主婦層など世代や分野を超えて何回もワークショップを開催し、市民の声を逃さず聞き込もうとする、その設計態度と姿勢に接し、改めてその芯のある凄味を感じずにはいられなかった。

2時間足らずのインタビューだったが、出会った当時から変わらない普通の会話ができ、楽しいひとときであった。長谷川さん、ありがとうございました。

塩見 寛

Kei_まちづくりネットワーク 代表
NPO法人くらしまち継承機構 理事





JIA 静岡 2019 年度建築家講演会

JIA のどの地域でも問題になっているが、会員の減少および財政再建は大きな課題である。講演会を企画するに当たり、有料の講演会とした場合どこまで人を呼び込めるか、理事会で議論を重ねた。

結果、静岡県出身の建築家で、県内の作品も多く、2018 年英国王立芸術院にて「第一回ロイヤル・アカデミー建築賞」に輝き、2018 年 12 月に日経アーキテクチャ「10 大建築人 2019」にも選ばれた長谷川逸子氏にお願いできないかということになった。

お忙しい合間を縫って静岡に駆けつけていただいた。

講演会は、長谷川逸子氏が自己紹介を兼ねて、日本ではなかなか認めてもらえない現実から始まった。まずは東京大学卒ではなく、女性であり、パートナーがないということから保守的な体裁に阻まれていたそう。私から見ると、日本を代表する女性の建築家の第一人者で、世界的にも認められている建築家である印象が強かったので、意外だった。何よりも意外だったのは、いわゆる建築家の高圧的な態度があるかと思っただけ、そのような点は全くなかった。

申し上がってきたという訳ではなく、生まれ育ってきた中での大きさ、知識と才能、集中力が他の人よりも優れていて、その才能を菊竹清訓氏も、篠原一男氏も見逃さなかったのだと思った。模型の技術の評価が入った菊竹事務所でも、単に模型を作っていたわけではなく、建築家としての疑問を抱き、リアリティーが見えてこない、どのように使っているのかが見えてこないと投げかけている。篠原一男研究室では、民家の研究を通して、その先にある新しい自然について考えるようになっていく。これが長谷川逸子氏の建築として造り出す「第二の自然」の原点となっていたと思った。いずれにせよ、建築家としての養成時期を恵まれた環境で過ごしてきた

ことが、社会に対して、環境に対して、人に対して健全な建築を造り出す長谷川逸子氏の基をつくっている。はじめに話した東京大学卒であるかの問題よりも、様々な偶然や必然があったが、日本を代表するような建築家の基で、それぞれの良さを確実に吸収し、かつ自分の建築技術として活かせる力に出来たことが素晴らしい。そして多くの人が応募した中で「湘南台文化センター」のコンペでの最優秀賞となる。

湘南台文化センターは、地域の歴史を調べた上で、建築として丘を立ち上げて、新しい自然としての「都市のきのこ」「第二の自然」を打ち出した。設計過程において「市民と意見交換をしてつくる」「老人がつくる劇場をつくる」など、運営者の意見、使う人の意見を聞く、地域の人たちとのワークショップをくりかえしている。地域の人たちの声を活かす設計手法は長谷川逸子氏の設計プロセスとして有名である。

様々なプロジェクトがあり、どの物件も有名だが、なかでも「新潟市民芸術文化会館」は秀逸の建築である。新潟市において信濃川は時代と共に地形を変えている。また新潟市民は「能」をする人が多く、伝統芸能が盛んなまちである。地理的な歴史、そこに住む人の歴史と営みを考えることから、建築設計が始まった。まずは敷地の性格を読み解くことであり、新潟の潟にもあるように浮島の敷地をどう生かすかであった。700 台の駐車場を基礎として、敷地には 3m の土を入れ替えて、木を植えて活動場である島をつないだ。

自然と建築が一体となった空間であり、場所である。また 2 重のパンチングメタルはエコな建築技術で、ホールには昼間は照明を付けずとも明るく、夜のみライティングして建物を演出している。

建物は運営者を育てることが大切であると長谷川氏は話す、その成果は新潟市民だけ

ではなく、日本を代表する劇作家や音楽師にも毎年使われている。今でも館の営繕に長谷川氏が設計協力することが多いそうだ。まさに新潟市民が建築家である長谷川逸子氏を全面的に信頼してのことだと思う。

「グローバル建築」についてザハ・ハディド氏に質問したことがあるという。世界のどこに建てても、同じ性能の建築ができることに意義を感じるというザハ氏に対し、長谷川氏はその地域でなければできない建築が唯一無二であり、地域の人達の公共性が大切だと考える。そしてその地域の人たちに愛される建物が継続して使われることを目指しているという。私は長谷川氏のその思いに強く共感した。

定員 100 名の会場で 94 名の来場者、書籍販売数 50 冊、など今までの JIA 静岡の記録を塗り替えるほどの活況の講演会であった。

また書籍の売り上げは長谷川氏自らの申し出により JIA 静岡へ寄付していただくこととなり、さらにサービスでサインまで快くしていただき、その姿勢に私達は勇気をもらい、次の JIA の発展につなげていかなくてはならないと感じた。



書籍に快くサインされている長谷川氏



高島 ゆかり (JIA静岡)

一級建築士事務所アトリエ結

第1回 JIA 塾

6月14日に第1回 JIA 塾が開催されました。建築の外構をテーマとした勉強会で、演題・講師は以下のとおりです。

第1部 「型枠ブロックによる『控壁を必要としない塀』のご提案とユニソン製品紹介」

講師：(株)ユニソン東海東営業所 落合秀幸氏 (JIA 静岡法人協力会員)

第2部 「自然素材をいかした外部空間づくり」

講師：植真 太田造園 太田真光氏 (JIA 静岡個人協力会員)

石橋 剛

静岡地域会 運営局長



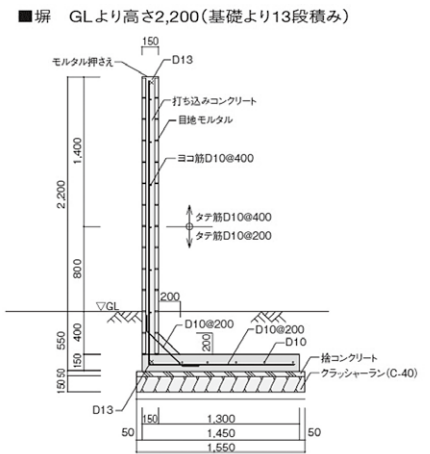
第1部 「型枠ブロックによる『控壁を必要としない塀』のご提案とユニソン製品紹介」

まずは、第1部について。昨年の大阪北部地震で高槻市の小学校のブロック塀が倒れ、通学中だった娘が亡くなるという事件は記憶に新しいと思います。危険なブロック塀はいち早く撤去するということが全国的に行われているなど、ブロック塀に対する風当たりは強いと思われます。ユニソンさんからの提案として、型枠ブロックによる塀の紹介がありました。コンクリートブロック塀だと控壁が出てきてしまい敷地内の通行の支障になるとか、敷

地の制約上型枠が組めないといった場合に、型枠ブロック塀のメリットがあるといいます。その他、駐車場緑化用の舗装材や遮熱性舗装材など、様々な外構用の建材の紹介がありました。



ユニソン東海東営業所 落合秀幸氏



第2部 「自然素材をいかした外部空間づくり」

続いて、第2部について。講師の太田さんは18歳で造園の世界に入り、京都での修行などを経て2006年、27歳の時に独立された造園家です。講演のスライドは、山の中を流れる小川の写真からスタートしました。太田さんによると、その写真に庭の要素が集約されているということです。すなわち、「土があって、水があって、石があって、樹木があって」といった状態を家の中に作る事が造園の仕事であるとのこと。そして、石や土といったそれぞれの要素について、それら自然素材の使い方を事例とともにスライドで見せてもらいました。たとえば、石であれば、敷く、

積む、貼るといった石の様々な使い方があったり、同じ貼るでもいろいろな貼り方があったりということです。石の場合は、採石場での石選びが重要な作業となり、石の山の中から使える石(全体の3分の1くらい)を選び分けるそうです。地道に選り分けられたトラッ



写真：植真 太田造園

ク1杯分の石も庭に敷くと10㎡くらいにしかならないということで、自然素材を使うことの大変さもよくわかります。石のほか、土、水、樹木といったテーマごとに丁寧に説明していただき、大変充実したレクチャーとなりました。



植真 太田造園 太田真光氏

プリツカー賞と磯崎新氏

—グランシップから見た創造性の行方—

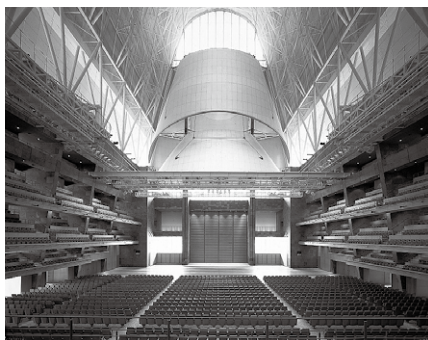


国際会議場



中ホール

1999年3月、今から20年前、東静岡駅のかつての操車場跡地に巨大な建造物が忽然と姿を現した。2年8か月の年月をかけて作られた県の公共施設、グランシップである。延床6万㎡、高さ60m、長さ200m、600億円というスケールを持つこのグランシップは正式名称を「静岡県コンベンションアーツセンター」と言い、磯崎新氏が設計した。当時の静岡近辺ではなかなか目にする事ができない、作品性とスケールと機能を持ち合わせていた。3つのホール、国際会議場、ギャラリー、会議室などから成り、高い芸術性の下に舞台芸術や音楽などを県民に広く浸透させる目的を持つ。特に200mの一軸上にリニアに配置された大中小の3つのホールはそれぞれ西洋に発祥由来を持ち、それらを参照しつつ、新たなホールとして設計された。一方コンベンション機能においても6室の同時通訳ブースを持つ国際会議場を始めとして、数々の機能が集積した複合施設となっている。



大ホール

2019年3月、磯崎新氏がプリツカー賞を受賞したとのニュースが流れた。満を持してというか、ようやくというか、とにかく日本

人8人目の受賞の栄誉に建築界は沸いた。「磯崎新」と言えば、建築家以上にその言説の鋭さもあまりに有名である。20年代～50年代にかけてやりつくされ、行きつき、単一化して閉塞状態にあった近代建築に、主題喪失という状況提示のもと、「手法」や「廃墟」の中に自らの創作を落とし込んだ創造行為に度肝を抜かれた。また、一つの芸術が体系を成して価値を形成した時から、その枠組み自体を「批評」し「解体」することこそ創作だとするパラドックスに溜飲を下げた。さらに、西洋的空間の出自を西欧の概念や思考の枠組みから紡ぎだし証明する鮮やかさ…。そのすべてが磯崎氏の信じられないような客観性に基づいた広い視野からの分析力を物語っていた。

グランシップ竣工の4年前、1995年に磯崎アトリエから針谷事務所にオファーがあり、その年の7月からグランシップの設計に参加することになる。「静岡県民国際プラザ」、頭文字をとって「SKP」。当時、グランシップはこんなプロジェクト名で呼ばれていた。高窓からの光がようやく届く半地下の部屋にはSKP設計のために磯崎アトリエの10数人が集められ、すでに基本設計が進められていた。

一人用ブースが4コマずつ両側の壁に平行して並び、それに挟まれた中央部はオープンで3×6(サブプロク)の製図版を向かい合わせにおいて細長い島ができていた。そこにブラウン管モニターを置きパソコンで図面を書く。我々はその島の一角をあてがわれた。

月一回程度の磯崎氏との打ち合わせに参加するたびに、壁に貼られているサンピエトロ寺院やロイヤルアルバートホール、サグラダファミリアなどのセიმスケールの断面図を

繰り返し見るようになった。SKPにおいて、何が行われようとしているのか、少しずつ分かるような気がした。

SKPとは西洋にその起源を持つカテドラルや、広場、そして劇場などの形式が歴史的に作り上げられた経緯を基に、その参照の集合体と言える。そして各時代の持つ「形」が国も文化も市民性も違う状況に置かれた時、ここに形式の由来を超えて進化し、使われ方やテーマ性の中に創作というものが顔を出すのではないか、と感じた。

「公共建築」という枠組みに対して、西洋の形を引用することで、予定的に持ち合わせている公共の常識を揺るがし、そこだけに留まる事のない建築として、または建築以上に影響力を発揮する存在として、その大きな可能性をSKPは担っている、とも思った。

20年前の磯崎アトリエでの2年間は壮絶ではあったが、しかし夢のような時間として今や記憶の果てにある。県民からの愛称募集によって命名された「グランシップ」のネーミングは、へさきを東に向けた「船」のメタファであり、建築を船に見立てた詩情性には思わずハッとさせられる。しかしこれこそが磯崎氏が忍ばせた形式の力であり、発想の飛躍ともいえよう。この「グランシップ」を俯瞰した時に初めてその構成が見えてくるラテン十字は、この建築の「西洋」という出自をいつまでも物語っている。



鳥居久保 (JIA 静岡)

針谷建築事務所



愛知学泉大学建築教室 一寸格子による 空間造形

西村 和哉 (JIA 愛知)
h+de-sigh/architect



6月14日、6月21日の2日間、愛知学泉大学家政学部の学生を対象に建築教室を行いました。家政学専攻の目標は「衣・食・住」を中心に新しいライフスタイルのデザイン、提案の出来る人材育成であり、その中で今回開催となる2年次前期開講の「ベーシックデザイン」は、インテリアデザイン、ファッションデザイン、テーブルコーディネートの素地を養う基礎的な造形訓練の科目として設定されています。学生たちは複数の課題作成を通して、色や形、テクスチャーの性質を理解し、それらをコントロールする方法を学修・獲得

してくなかで、今回、JIAの提供される「建築教室：一寸格子による空間造形」（一寸格子＝長さ3尺・6尺、断面一寸角の間伐材の角棒）により、「構築」することを学び、また身体スケールで空間を経験することを通して、「空間」という概念に対する理解を深めることが目的です。それと同時に、強く・美しい構造の可能性を試行錯誤することは、家政学専攻での住関連の科目（住生活論、住文化論、インテリアデザイン）での学修内容とも繋がり、より深い学びとなればと考えます。

1日目の事前授業では、導入として「JIA 建築家について」を会員がレクチャーした後、割り箸を使ってS-1/10程度のモックアップを作成します。今までは小学5年生を対象として行ってきましたが、今回は建築学系の学生ではないこと、大学生とはいえ逆に頭が硬くなり「柔軟性」「想像力」が懸念されましたが、学生15名が4班に分かれ時間をかけ建築家と一緒に考えられた今回は、その場で試行を繰り返し、作品性や構築力を高められました。建築学に関わらないが故か固定概念の「しぼる」に囚われない、「うかせる」「つながない」「ひっかける」「かしめる」「ゆれる」「たれる」と、新しい構造的な発見が生まれました。

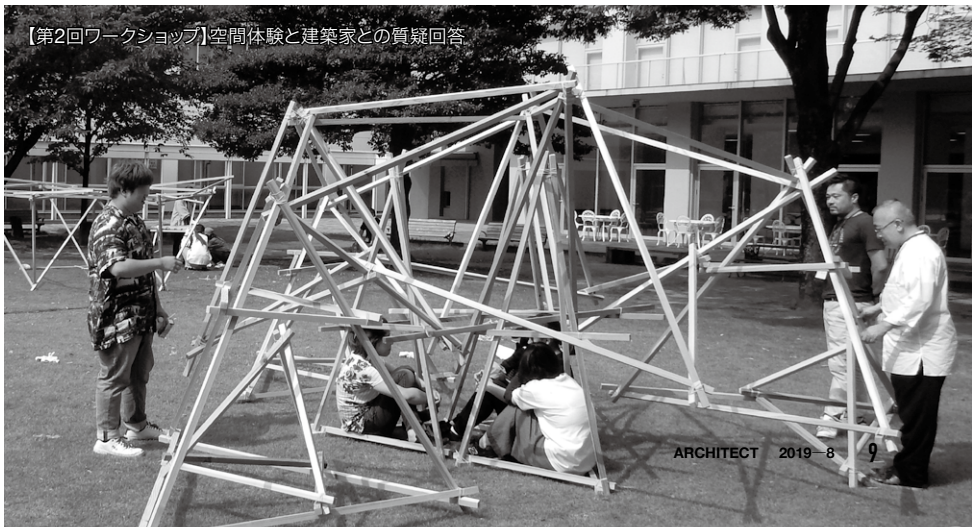
2日目の実寸作成では、中庭を敷地として見立て、配置計画から学生に考えてもらいました。1日目の新しい発見を実現するため、建築家と現場で思考し工夫した結果、「空間体験」に加え「構造美」をもち、意匠上も軽快で繊細な作品が誕生したのではないのでしょうか。完成後は各チームの学生から「設計コンセプト」を発表してもらい、建築家との質疑回答を繰り返し、「成果」と「問題点」の発見もできました。作りこむだけでなく「引き算のデザイン」の重要性もあげられました。「ベーシックデザイン」としての目的は達成できたかと思いますが、JIAとしては時間外にて、できれば受講外の学生にも観覧・空間体験をしてもらい、設計・施工した学生本人達が作品説明をし、「建

築家の想い＝つくることの喜び」を体験してもらうことで、更にこの「建築教室」の価値を上げられればと感じました。

今回のワークショップの実施は、建築学科やデザイン学科の学生ではない、つまり建築や造形を専門としていない一般大学生に向けての建築教育を考える際の一つのケーススタディともなるかと考えられます。近い将来社会人となる学生が、今後の日常において「建築」を意識し、「住」を考え、自分たちの街に対する関心を持ち、社会に今回の体験を還元し、さらには子ども達へこの「学び」が広がることを期待します。また、建築家が自分たちの生活：「住」と密接に関わっていることを知る機会となればと願います。



【第1回事前授業】建築家と一緒に考える



【第2回ワークショップ】空間体験と建築家との質疑回答

ひとりごと

私は生まれてこの方、人生の岐路に立つ時いろいろな人々と出会い、様々な影響を受け、恵まれた人生であったと何時も考えている。又20代のとき抱いた夢を全て実現できたことは大変恵まれた人生だったと今は感謝の気持ちでいっぱいである。

最近名古屋駅前のモニュメントが解体・移転の議論があちこちで聞かれ、設計した私でさえ、どの様になるのかわからないでいる状態である。このモニュメントも20年経つのも何かの縁であろうと思っている。いろいろな場所で聞かれる保存・移転・

解体の議論は今回触れないでいることにする。このタイミングで人生の節目と考え、今までの自分を振り返ることとする。

設計活動に従事し早50年が過ぎようとしている。20代は建築に燃え、当時の建築家の活動に憧れ、追っかけをしていたころかもしれない。30代は設計が楽しく、体にムチ打って徹夜で設計活動をしていた時期でもある。40代は自分の作品といえる建築に関わることができる時期で、正にまわりとの競争の時代であったし、自分の考えを確立するときでもある。私はこの時期に独立し、新しい道を踏み出している。50代は人生で一番きつく、自分の考え、個性を発揮し、社会の認知を得るときでもある。又個人の個性を発揮できる大事な時と言える。60代、人として評価され、経営・組織を考え設計活動に違う要素がふりかかるときでもあった。70代は自己の考え、活動が完成し社会が認める世代

でもある。なぜ今、このような人生の振り替えを考えるのかは不思議であるが、自分の集大成をどこかで実現したいと言う願望が働くからではないだろうか。しかしその願望も行き着くものではないだろう。その中で新しい今までに無い考えを実現したいという願望も強くなる。この時代何を實現していけばいいかまだ答えの無い日々である。



伊井 伸 (JIA 愛知)
都市造形研究所



2019年は、あの映画の舞台。

先日、どうしても見ておきたかった「シド・ミード展 PROGRESSIONS TYO 2019」へ(会場は「3331 Arts Chiyoda (アーツ千代田)」設計:リライト。旧練成中学校を再利用したアートセンターです)。

シド・ミードは、工業デザイナーでありながら「ブレードランナー」「スタートレック」「トロン」などSF映画の美術や「Vガンダム」「YAMATO2520」などロボットアニメーションのメカニックデザインを多く手掛けています。キャリアは

60年以上。その活動から「ビジュアル・フューチャリスト」と呼ばれ、数多くのクリエイターや作品に影響を与えている世界的な工業デザイナーです。

私は小さいころからSF映画やロボットアニメーションが好きでプロダクトやCDジャケットなどのグラフィックデザインにも惹かれていたので、工業デザイナーとして空想の世界もデザインするシド・ミードに憧れを抱くようになったのは必然でした。

大学で建築を学び始めた最初の頃は、プロダクトのようなモノに比べてスケールが大きすぎる建築に戸惑いしかなく、なかなか馴染めなかったのですが、レベウス・ウッズやニール・ディナーリなどアンビルドな建築家のドローイングに出会って、元々好きであったシド・ミードのような世界観と建築が結びつき、設計が急に楽しくなった事を今でも鮮明に覚えています。

私が建築を勉強し始めて28年目の年

に、日本で34年ぶりに開催されたシド・ミード展、自分自身の原点を改めて見つめる良い機会になりました。

そうそう、みなさんをご存知ですか。今年2019年は「ブレードランナー」の舞台となった年。



3331 Arts Chiyoda (アーツ千代田)



渡辺 隆 (JIA 静岡)
渡辺隆建築設計事務所

データ発掘 (お気に入りの歴史的環境調査)

蒲郡北駅前地下道

昭和30年代の蒲郡市中心市街地は、東西に走る「国鉄」「名鉄」の線路により、歩行者は鉄道路切まで迂回をしなければならず大変不便であった。

鉄道線路で分断されていた南北の市街地を地下道で結ぶため、地下道の建設工事が1967年(昭和42年)1月から開始され、工事は三期に分け進められた。

第一期工事(工事延長24m)として、蒲郡駅前ビルから駅前広場歩道まで行われ、1967年(昭和42年)6月に完了した。また同年12月には、土地区画整理事業によって駅前広場が完成し、同時に地下街の営業が開始された。



地下道入口1

地下道入口2

1969年(昭和44年)1月には、国鉄蒲郡駅新駅舎が仮使用開始され、同年4月に第二期工事(工事延長34m)である駅前広場歩道から駅舎まで地下道延長工事が完了した。

1972年(昭和47年)2月から第三期工事(工事延長71m)が開始され、同年7月16日に地下道を利用して中心市街地を南北に往来できるようになった。

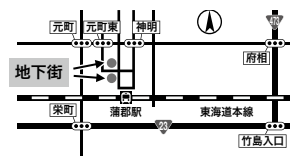
その後、蒲郡駅の鉄道高架化により、蒲郡駅の南北を結ぶ地下道は2006年(平成18年)に一部閉鎖された。

この地下道には、現在も6店舗のお店が営業しており、常連客が利用する古きよき時代の落ち着いた雰囲気を感じさせている。

取材に際しご協力して頂きました蒲郡市役所 都市開発部 都市計画課の職員の方々、管理会社の方々に心より感謝申し上げます。



地下道・地下街



●名称等

正式名称:「蒲郡北駅前地下道」
店舗数:6店(2019年6月時点)
地下道の管理会社:「有限会社 蒲郡駅前ビル」
所在地:蒲郡駅北側

●参考資料:

- (1) 広報がまごおり 昭和42年6月
- (2) 広報がまごおり 昭和43年9月
- (3) 広報がまごおり 昭和44年2月
- (4) 広報がまごおり 昭和47年3月
- (5) 広報がまごおり 昭和47年7月
- (6) 広報がまごおり 平成29年6月

塚本 隆典 (JIA 愛知)

塚本建築設計事務所



データ発掘 (お気に入りの歴史的環境調査)

岐阜県下呂市・「旧湯屋小学校」

この建物を初めて目にした時の印象は「オッ!キレイ」だった。JR高山線の飛騨小坂の駅を降りると、まず臙脂色の山小屋風デザインの木造駅舎に目をうばわれるが、車で10分程山奥に入ると紺碧の空と濃い緑の山並みをバックにした、これまた、臙脂色の綺麗な建物が目の前にあらわれた。それが今回採り上げた「旧湯屋小学校」である。この建物のある旧益田郡小坂町(現下呂市)は、過っては御嶽への登山口や御嶽山麓の温泉郷への入り口として賑わいを



JR飛騨小坂駅舎



旧湯屋小学校

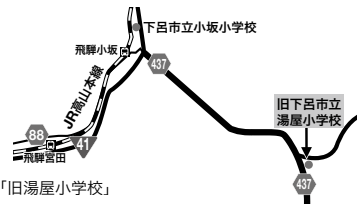
みせた町である。

明治9年小坂町落合に設けられた落合学校が、同16年に小坂町湯屋へと移り湯屋小学校と改められた。その後大正11年に改築、昭和29年に現存する木造校舎が新築された。がしかし、創立136年の平成24年3月に閉校となり、現在は使用されない状態が続いている。平面プランは北側片廊下型の一般的な校舎であるが、外観に特徴がある。外壁面の建具を白く塗装した四方枠で押し付け、左右方立と躯体の柱とをボルト留めとする納まりで、経年後の取替え時を想定した意匠が施されている。また、木太の檜材を贅沢に使用した質



自然の文と坪の窓の 美と趣を誇りつつ 木の優しさいっぱい湯屋小学校

実剛健さは、決して装飾的ではないものの単調ではない。子供らのことを第一に考え実用性に重きを置いた設計は、地域の人々によって長らく使用され、最も親しまれた建築であろう。現在、解体か再利用かで模索中であり、耐震補強工事の費用の目途が立たなければ解体の道へと進まざるを得ないのが現状である。地元の有志が「旧湯屋小学校」と「飛騨小坂駅舎」の存続を求めて活動されているが前途は多難を極めている。



名称:「旧湯屋小学校」
所在地:岐阜県下呂市
建設年月日:校舎(昭和29年)
規模:延べ床面積:約1400㎡
参考資料:岐阜県小坂町誌

原 眞佐実 (JIA 愛知)

原建築設計事務所



地域会だより

■静岡地域会

<報告>

・7/12 静岡地域会役員会の開催

■愛知地域会

<報告>

- ・7/12 賛助会：CPD 研修
 - ・7/12 けんちくかフェス委員会
 - ・7/18 浅井裕雄 + 吉田澄代 受賞記念講演会
 - ・7/26 行政シンポジウム
- <予定>
- ・8/5 八団体連絡会議・名古屋市副市長昼食会
 - ・8/9 暑気払い

■岐阜地域会

<報告>

- ・7/27 JIA の窓
岐阜の若手建築家 住宅作品
～暮らしの様子を訪ねる旅～
内容：住宅見学会（3 作品見学予定）

■三重地域会

<報告>

- ・7/12 第3 回例会・会員研修会・暑気払い
内容：最新法改正による環境整備・
受験者の傾向合格率
講師：総合資格学院

<予定>

- ・9/13 第4 回例会・会員発表会
- ・未定 第5 回 三重県と JIA 東海支部との
防災協定締結に関する協議

Bulletin Board

第7 回 JIA 東海住宅建築賞 2019

「公開最終審査 & 表彰式」のご案内

日 時：2019 年 8 月 4 日（日）15:00～（開場 14:30～）

場 所：名古屋工業大学 NITech Hall

参加費：無料

対 象：どなたでも参加出来ます

定 員：350 名

問合せ先：〒460-0008 名古屋市中区栄四丁目 3 の 26

昭和ビル 5 階（公社）日本建築家協会東海支部内

Email：shibu@jia-tokai.org

TEL：052-263-4636 FAX：052-251-8495

会場アクセス

地下鉄桜通線吹上駅 2 番出口 徒歩 3 分→地下鉄吹上（バス）乗車 2 分徒歩 5 分

地下鉄鶴舞線鶴舞駅 4 番出口 徒歩 10 分

主催 中部建築賞協議会

「第 51 回 中部建築賞 2019」のご案内

応募期間：令和元年 8 月 1 日（木）～8 月 31 日（土）

※郵送等で送る場合は、9 月 2 日（月）必着とする。

応募作品：平成 31 年 3 月 31 日までに竣工した新築、改修、修復等
がなされた建築物（一団の建築群を含む。）で、作品点数は制限しない。

申込書提出（問合せ）先及び提出期間

提出・問合せ先：中部建築賞協議会

〒460-0008 名古屋市中区栄四丁目 3 の 26

昭和ビル 2F 東海建築文化センター内

TEL：052-262-0838 FAX：052-262-0839



詳細はホームページにてご確認ください。

http://www.tkbc.jp/arc_boshu.html

編集 後記

●新体制になり、初めての特集が静岡地域会特集となりました。最初は、静岡地域会総会記念講演会が静岡出身の長谷川逸子氏にお願いする事が決まっていたので、「長谷川氏の特集が組めたら最高だね」という広報委員の方々の一言からでした。紹介して下さった塩見氏高島氏夫妻に相談したら、早速、長谷川氏に聞いて下さり、インタビューして、塩見氏が原稿を書くなら OK、とまさかの快諾でこの企画は実現できました。建築家講演会の記事（高島氏著）と一緒に読むと、長谷川氏の人となり伝わってきます。また、鳥居氏には静岡特集ならではのエッセイをお願いしたらブリッカー賞を受賞された磯崎氏と静岡を代表するグランシップを自身の体験を交えた形

でまとめて下さいました。グランシップ誕生秘話とも言える内容の記事は静岡の方々に幅広く読んでいただきたい完成度となっています。静岡地域会特集にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。（大橋康孝）

●鳥居久保氏による「ブリッカー賞と磯崎新氏」という記事を拝読しました。2019 年、建築界のノーベル賞とも称されるブリッカー賞を受賞した磯崎新氏。20 年前に彼と設計作業をした2年間について、今や記憶の果てにあるとありますが、刺激的で充実した時間だったことと彼への尊敬の念が伝わってきました。磯崎新氏は、既存の枠組みにとらわれることなく独自の建築を打ち出し、常に進化し続けていることが評価されました。最近では建築界のみならず、スポーツ、文学、医学、芸術、アニメなどさまざまな分野において日本人が世界中で活躍しています。グローバル化、ネット社会の進化によりあらゆる情報の

送受信が可能になったことも後押ししていると思います。膨大な量の情報という大海原に対して敏感かつ柔軟に対応し、前へ進んでいくことが、建築界のさらなる発展につながると感じています。（石川英樹）

ARCHITECT

第 371 号

発行日 2019.8.1（毎月 1 回発行）

定 価 380 円（税込み）

発行責任者 矢田義典

編集責任者 中澤賢一

編 集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
（有）イツミ印刷所内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564) 21-2657 FAX 26-1792

発 行 所 （公社）日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail：shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>



JIA 建築ワークショップ@豊橋

「お店をつくろう！～小さなまちづくりプロジェクト」

本事業については、昨年10-11月号の本誌レポートでも詳しく書いた——、今年も豊橋市での建築ワークショップとして、「とよはし都市型アートイベント Sebone (セボネ)」との連携企画「お店をつくろう！」の実施の時節となりました。一年は、早いモノです。

企画の内容について——、対象としているのは、まちなか(中心市街エリア)にある2つの小学校の全児童。身近に商店街があり、自営や、祖父母などの身内が商店を営んでいたりする環境に育つ子供たちに、「お店」を題材に学年毎のテーマに合わせて、絵画や工作の

作品をつくってもらう。それらが展示会場で連なって、通りや商店街がつけられ、風景ができ、“小さなまち”になっている。「まちなか=自分の育った環境を知る」というのが意図である。

会場には、～まちなかに育ったという経験は、こどもたちの財産です～と掲示している。将来、自分の暮らす地域と関わる時、自分の育った環境やそこでの経験が、アイデンティティ(発想の基盤)になるはず、との思い。

JIAとしては、この企画へ参画して、今年で3年目。愛知地域会では、「建築教育」を主眼に置き、活動を通じて、一

般に「建築家」への認知と理解を拡げ、建築やまちづくりへの興味や関心、知識を高めてもらうことを目標にしています。さらに、一昨年創刊された「建築家+」の第2号刊行にあたり、「建築と子ども」を特集することを決めています。すでに、両校4年生への工作の授業を終え、7月23日-25日のサマースクール(工作ワークショップ)の準備も万端です。是非、「小さなまち」の完成を見に、豊橋までお越しください。

黒野 有一郎 (JIA 愛知)
一級建築士事務所 建築クロノ



【今後のスケジュール】

- ・会場設営・展示準備・審査 (CPD 4単位/各日)
8月28日(水曜)・29日(木曜)の2日間
- ・展示期間 (WS※対応: CPD 4単位/各日)
8月30日(金曜)・31日(土曜)・9月1日(日曜)の3日間
(※期間中、建築ワークショップを企画中)
- ・表彰式・講評会
9月1日(日曜) 15:00～

【展示会場】

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT (アートスペース)
〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地

【とよはし都市型アートイベント Sebone】

URL: <http://seboneart.com/wp/>

